

# とうや湖地域 畜産クラスター協議会

## 1 地域の概要

### (1) JA とうや湖の概要

とうや湖地域畜産クラスター協議会の範囲は、JA とうや湖管内の酪農、肉用牛及び養豚経営となっている。

JA とうや湖は、北海道中央南西部に位置する洞爺湖を取り囲む洞爺湖町（旧虻田町、旧洞爺湖村）、豊浦町、壮瞥町、伊達市大滝区（旧大滝村）の旧5町村のJAが昭和62年3月に道内では初めてとなる広域合併農協として設立された。

地域の北には羊蹄山、南には有珠山や昭和新山など活火山に囲まれており、道内では比較的温暖で湿度が高く多種多様な作物栽培に適している。

特に、洞爺湖と有珠山に隣接した壮瞥町では、温泉熱を利用した施設園芸が盛んである。

また、洞爺湖北西部山岳地帯では傾斜地が多く、積雪量の多い地域では酪農をはじめとする畜産が盛んである。

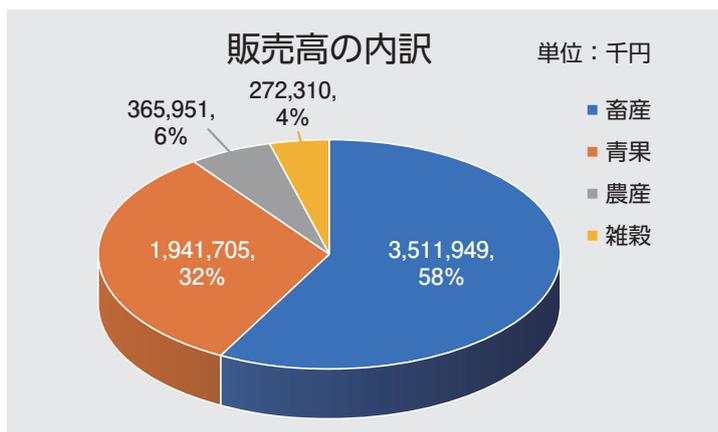


資料：JA とうや湖ホームページ資料から抜粋

## (2) JA とうや湖の農産物販売高

JA とうや湖管内で生産する農畜産物の作目は多彩であるが、畜産の販売高が全体の 58%をしめ、主要作目となっている。

畜産物のうち、肉豚が 1,976,465 千円 (56.3%)、肉用牛が 828,424 千円 (23.6%)、生乳で 707,060 千円 (20.1%) となっている。



## 2 とうや湖地域畜産クラスター協議会

### (1) 組織の概要

①設立年月日：平成 27 年 3 月 12 日

②設立趣旨：畜産を営むものを中心として、各関係機関がそれぞれの責任と役割のもと、地域畜産の収益性向上と生産規模の維持・拡大を図るための取り組みを推進する。

③構成員：畜産農家 40 戸 (酪農 13 戸、酪肉複合 1 戸、肉牛 23 戸、養豚 3 戸)

JA とうや湖

サツラク農協

CFI 株式会社 (コントラクター)

豊浦町、洞爺湖町、壮瞥町、伊達市大滝区

胆振農業改良普及センター

みなみ北海道農業共済組合

とうや湖酪農振興会

とうや湖和牛生産改良組合

とうや湖養豚振興会

とうや湖酪農ヘルパー利用組合

とかち繁殖技術研究所

ホクレン

各機械メーカー

### (2) 地域における課題

#### ①酪農

経営者の高齢化が進み年々農家数は減少の一途を辿っている。酪農経営では、粗飼料基盤の維持・拡大が必要であると同時にコスト低減のために飼養規模の拡大も求められている。

しかし、主に山岳部に点在する当地域の酪農経営は、労働力の確保がままならず労働負担の軽減が大きな課題となっている。

一方、粗飼料生産の効率化を図るため、コントラクターを設立し、大型作業機械の導入による共同化を図っているが、酪農家自らがオペレーターとして出役する必要があるため、作業ローテーションに苦勞し粗飼料の適期収穫や労働負担軽減に苦慮している。

## ②肉用牛

当地域の肉用牛経営は、畑作との複合経営が約 63%と多く堆肥を経営内で循環させることで地力の維持・向上を図っている。

しかし、高齢化等により労働力の確保が困難な状況に加え、施設・設備の老朽化により増頭は困難な状況にあり、畑作への転作や離農による戸数減少が続いている。

## ③養豚

昭和 20 年代から豚肉の産地化に取り組んできたが、平成 10 年に 15 戸あった養豚農家が、高齢化や労働力不足、さらには飼料等資材価格の高騰や豚肉価格の低迷により、現在では法人 2 戸、個人 1 戸の計 3 戸まで減少している。

# (3) 畜産クラスター協議会の取り組み

## ①コントラクターの設立

酪農経営や肉用牛経営の規模拡大に応じ、必要となる良質な粗飼料を確保するとともに、労働負担軽減と適期収穫を可能とするため粗飼料生産コントラクター（CFI 株式会社）を平成 28 年に設立。

畜産クラスター事業を活用し、大型機械の導入と畑作農家等との連携により適期作業による良質粗飼料の確保と労働力負担軽減を図り、酪農や肉用牛経営の規模拡大と担い手の確保を補完する。

## ②酪農経営対策

規模拡大及び省力化のモデルとして、牛舎の新築・改築を行うとともに搾乳ロボットや自動給餌機、餌寄せロボットなど省力化のための機械を導入・運用し、その効果を検証しながら管内の酪農家へ普及していくこととしている。

また、町・JA では施設補修に対する助成を行うとともに、事業費補助残の融資に係る利子補給等を実施し、農家の負担軽減措置を講じている。

更に、酪農ヘルパーの利用拡大による定期的休暇の取得を促進し、ゆとりある経営の実現を目指し地域の持続的な酪農の発展を図っている。

## ③肉用牛経営対策

当地域の酪農家と連携を図り、育成牛預託システムを構築。

酪農家で生まれたホル子牛をおおむね 7 か月齢で中核的肉用牛農家へ預託し、肉用牛農家では優良黒毛和種の受精卵を当該牛に移植後、分娩 2 か月前に酪農家へ返却。分娩した子牛は、中核的肉用牛農家へ売却する。

これら預託システムを構築することにより、肉用牛農家では自家産子牛の販売とともに、ホル預託牛の分娩子牛の販売も可能となり、規模拡大を最小限に留め販売頭数の増頭が可能となる。

一方、当預託システムを利用する酪農家は、育成牛にかかる労働負担を軽減するとともに、育成牛飼養頭数を制限しながら経産牛の増頭を図ることが可能となる。

また、地域全体で高育種価牛の受精卵移植を推進し、更には施設の新築・改築を進めるとともに、自動給餌機等の導入を図り規模拡大を推進している。

#### ④養豚経営対策

従来の繁殖・肥育一貫経営から「地域生産分業体制」とするため、繁殖センターを設置し繁殖部門と肥育部門の分離によるツーサイト方式による飼養体系を構築する。

この体制の構築によって、家畜伝染病に対する危険分散が出来るとともに、繁殖管理技術と肥育管理技術の体系にそれぞれ専門性を持たせることが可能となり、事故率の低減などが見込める。

また、繁殖センターの新設や既存肥育舎の増改築のみならず、肥育豚舎ではオートソーティングシステム（肥育豚の体重を自動計量して出荷できる豚を自動的に選別する装置）の導入などで省力化を図りながら規模拡大を行う。

※自動計量機は、出荷できる豚を自動計量して、自動的に選別する装置であり、豚が計量機を通過する時目的の体重に達したら出荷スペースへ、達しなかったら餌場への扉が開き、人の手を借りることなく出荷スペースへ誘導することができる。

#### ⑤ブランド化

##### ●とうや湖和牛

JA とうや湖管内で繁殖から肥育まで一貫生産された黒毛和種で、日本食肉格付協会の牛脂肪交雑基準 BMS NO.5 以上を満たした上質な霜降り肉。



北海道だけでなく東京食肉市場に出荷され関東地域で食肉販売がなされ、道外はもちろん地元洞爺湖周辺や札幌等で、肉質の良い和牛肉として高い評価を得ている。

平成 27 年 12 月から地域団体商標出願を取進め、3 年がかりの平成 30 年 11 月に道内としては 31 件目の商標を取得。

現在、定期的に対米輸出可能なホクレン十勝枝肉市場に出荷しており、和牛輸出とブランドの定着化を目指す。

##### ●とようらポーク

当地域では、昭和 20 年代から残飯などを給与しながら正月用の臨時収入を得るために豚の飼養が始まっており、昭和 30 年代からは農業用の土づくりのため多頭化を図ることを目的に種豚場が建設された。



現在までに60年以上の歳月をかけて豚肉の産地化に取り組み平成27年には産地銘柄として地域団体商標を申請している。

「とようらポーク」は、毎年6月に開催され4万人が来場する「いちご豚肉まつり」でPRされ好評を博している。

### 3 (有) K・B・F (酪農)

#### (1) 経営の概要

平成16年1月に法人を設立し、現在の経営者は3代目である。

搾乳牛舎1棟と育成牛舎2棟にて酪農を営んでいたが、課題であった労働力不足解消のためロボット搾乳用牛舎を新築。

生乳出荷量は、地域平均を大きく上回り、地域内の中心的経営である。

草地は、近隣の離農耕種農家から農地を借入れ草地として有効活用するなど遊休農地対策に取り組んでいる（飼料作付面積71.3ha）。

また、草地整備事業を活用した自力による草地更新や土壌分析・堆肥成分分析結果に基づく施肥設計などにより生産性の向上を図るとともに、スイートコーン加工場から産出されたスイートコーン殻の再利用などにより購入飼料費の節減に努めている。

#### (2) 事業の概要

##### ①施設整備 28年補正



- フリーストール牛舎（ロボット牛舎） 1827.94㎡
- 糞尿処理施設 2041.00㎡
- 搾乳ロボット（LELY社製） 2台

餌寄せロボット（LELY 社製）1台  
牛床マット、カウブラシ、換気扇、  
ケーブルクリーナー  
スラリーストア 2,041m<sup>3</sup>

●初期投資額

総事業費 221,616 千円



規模拡大のためフリーストール牛舎を新築し、労働負担軽減のため搾乳ロボット2台を導入。

また、ケーブルクリーナーの導入により自動で除糞処理を行うなど作業時間の短縮を実現している。

糞尿処理においては、スラリーストアを整備し、良質なスラリーを草地に還元するとともに、耕種農家の要望によりスラリーの一部を供給することも可能となっている。

②機械導入

●29年補正

ミキサーフィーダー（牽引式） 9,320 千円

●30年補正（申請中／承認済）R3.4 納品予定

テレハンドラー（サイレージ等積込み・取出し） 14,750 千円

サイレージクラブ 950 千円

パレットフォーク 200 千円

ミキサーフィーダーは令和元年8月に導入され稼働している。

ロボット搾乳に加え、給与飼料の調製及び給餌に係る労働時間の削減がなされ、目標年の令和2年には経産牛145頭、令和3年には149頭に増頭することを予定している。

施設の竣工は平成30年6月15日で、飼養頭数の増加につながっている。

●平成27年 総頭数151頭 経産牛95頭 生乳生産量 888t

●令和元年 総頭数172頭 経産牛106頭 生乳生産量 1,019t

### (3) 管内畜産振興にむけた関係機関の連携

(有) K・B・F を含む管内 10 戸の酪農経営は、実証モデルとして搾乳ロボットや自動給餌機、TMR ミキサー等を導入するための牛舎を新設しその効果を検証している。

これらの実績を JA や農業改良センターが中心となって分析し結果を「とうや湖地域省力化検討会」に提供し経営体系の確立や普及に資することとしている。

また、規模拡大に伴い必要となる良質な粗飼料の確保については、コントラクターの利活用を推進するとともに、農業改良センターを中心とした土壌分析や堆肥分析に基づく適切な施肥設計や草地更新により、粗飼料中のタンパク含有率を下げないよう雑草の繁茂やマメ科牧草の植生割合を一定以上に保つなど技術協力がなされている。

酪農家と肉用牛農家が連携した「育成牛預託システム」の運用については、JA、普及センター、管内自治体、酪農振興会が主体となり飼養管理改善のための検証を行うとともに利用拡大のための利用調整を行っている。

また、肉用牛経営に対しての乳用牛の育成管理について、普及センターを中心に講習会等を開催し、とうや湖和牛生産組合では和牛受精卵の確保と採卵の調整を行うとともに、とかち繁殖技術研究所の受精卵移植技術指導を受けている。

更に、酪農家に対する乳質向上のために、みなみ北海道農業共済組合が主体となって搾乳立会と乳汁検査を行った上、乳質・乳房炎等疾病改善指導を実施している。

酪農家に対する繁殖成績向上と飼料給与については、とうや湖乳牛検定組合が主体となり乳検データを活用して飼料設計を実施している。

このように当地域の畜産は、高齢化や後継者不足により戸数の減少が進んでいるが、各関係機関・団体が有機的に連携し、それぞれの機能をはたして労働力省力化と規模拡大により畜産業の維持・発展と利益獲得、更には後継者の確保を推進している。

(一般社団法人北海道酪農畜産協会、鎌田哲郎委員)